

第 80 回 歴史リレー講座「日出ずる処の聖徳太子」 河上 麻由子氏 (R3.5.16)

みなさんの中で、今世紀初めごろから注目され始めた「聖徳太子不在説」を耳にされた方は多いでしょう。その内容を一言で説明すれば、「厩戸皇子や上宮太子など呼び名が多様で、後世に付加された超人的な伝説が多すぎることを勘案すると、聖徳太子は架空の人物だ」というものです。しかし、名前がなんであれ推古天皇を補佐し、外交や国内制度改革を蘇我馬子とともに主導した人物が存在したことは史実です。そして、その人物が聖徳太子であることは数々の出土遺構によって証明済みです。不在説は、『日本書紀』の史実性を頭から疑った、いわば戦後の歴史学会における行き過ぎた史料批判の産物といえます。

太子が幼少のころ、中国は隋王朝によって 300 年ぶりに南北統一され (581 年)、分裂の時代は終焉。隋は大軍をもって周辺国を次々と手中に収めます。そんなアジア最強国の君主煬帝^{ようたい}を相手に太子が「日出処天子」として送った手紙に煬帝が激怒した (607 年) と、私たちは教科書で教わりました。しかし、「激怒」の部分は『隋書』では「不悦 (喜ばない)」なので、少々ニュアンスが異なります。

そもそも、『隋書』に描かれている国家像について私たちの知識は乏しいものです。隋の根底をなす思想を中華思想と呼び、その文字、言語、礼節などが中華と同一でない国と蕃夷^{ばんい}といいます。当時の隋の文化はずば抜けて進んでおり、蕃夷を保護する立場にありました。例えば日本が隋に未加工の絹を献上すれば、隋は褒美として螺鈿紫檀五弦琵琶 (正倉院蔵) などの至高の芸術作品を与えました。これを朝貢貿易と呼びます。

さて、南北統一を成しえた文帝 (煬帝の父、541~604) とは、どんな人物だったのか。名を楊堅といい、猛将の父を持ちながらも、幼少から尼僧に育てられました。15 歳で早くも高官に就き、17 歳で名家の娘、伽羅と結婚。569 年、父亡き後に隋国公を継承。その 12 年後には隋を建国、即位しています。隋の時代は 37 年間と短いものでしたが、楊氏の血筋は女系を通じて唐に受け継がれていきました。煬帝を暴君と見なし、隋を滅ぼした唐の初代皇帝李淵とは姻戚関係にあり、唐の 3 代皇帝高宗の妃則天武后は楊氏の出です。

文帝の外交は高句麗に対して特に強硬なものでしたが、これも国家の再分裂を恐れてのこと。その一方で、彼は非常に敬虔な仏教信者でもありました。例えば、曇延という僧の勧めにより、重臣たちとともに必死で雨乞いの祈りを捧げた結果、甘雨が降り注いだという逸話が残っています。601 年からの大仏教事業では、自身の三法帰依を表明し、全国各地に 100 基を超える舍利塔を建立。300 年の長きにわたる分裂という溝を埋めて国家を統一するため、皇帝と仏弟子二つの立場から政教一致の政策を推し進めました。

そのころの日本は、仏教信仰に消極的だった敏達天皇の時代。しかし、593 年に推古天皇が豊浦宮で即位すると、蘇我氏が建立した飛鳥寺 (法興寺) に仏舍利を安置するなど次第に仏教信仰が勢いを増していきます。606 年には本尊像が完成。摂政の聖徳太子は渡来僧侶から得た隋の最新情報を分析するうちに、今後のアジア情勢は隋によって左右されると確信するに至りました。さらに、制度改革を断行するなかで隋が採った仏教政策こそが日本国家統一に不可欠だと悟ります。

そして、文帝・煬帝の時代に遣隋使 (600 年~615 年) を 5 回実施。日本は隋の仏教政策を重ねて讃美し、その教を学びたいと要請しました。これが史実です。その甲斐あって 607 年に裴世清^{はいせいせい}が来日したことは、太子が正確かつ最新の情報を駆使した外交成果にほかなりません。大切なことは、教科書にあるように対等に主張したわけではないということです。では、なぜ対等外交説が人口に膾炙したのか。それは日中戦争中の国策と一致していたからです。当時の日本にとっては対等な外交こそが課題であり、国力が増強するにつれ、不均衡な外交をどう転換するかが国家の命題になりました。その結果、『隋書』の遣隋使に関する数行を対等外交の象徴として抽出したのです。すなわち、国家外交が対等であるべきとの考えが主流となるのは 19 世紀と、歴史的にはごく最近です。私たちが史料を通して史実を解き明かしたいのなら、近代の視線とは別に古代の人々の思いに寄り添う姿勢も忘れてはなりません。